

はじめに

石神遺跡は飛鳥寺の西北に位置し、南接する水落遺跡（瀬刻古）と一体の遺跡です。須弥山石や石人像が出土したことから、斉明朝（7世紀中頃）には、蝦夷や倭人など辺境の民や外国使節を饗宴する施設があったと考えられています。奈良文化財研究所は1981年以降継続調査を実施し、7世紀を通じて計画的に配置された建物・広場・井戸・溝などが、何度も造り替えられた状況を明らかにしています。今回の調査は21回目（石神遺跡第21次）になります。

調査区の北側で実施した昨年度の発掘調査（石神遺跡第20次）では、斉明朝期の遺跡の東限施設とみられる南北方向の総柱建物を確認しました。今回の調査は、東限施設の南の続きを確認し、あわせて周辺の状態を明らかにする目的で実施しています。調査開始は2008年10月2日で、調査面積は480㎡です。

遺構の変遷

7世紀前半と後半の2回の整地土の上に展開する掘立柱建物群や塀を確認しました。これらの遺構は整地の時期差や遺構の重複関係から8時期に分けられます。

7世紀前半～中頃（Ⅰ～Ⅳ期） Ⅰ期に最初の整地が行われ、Ⅱ期以降、調査区西側を南北に通る塀1・4と、塀に取り付く建物1～3が営まれます。その東約16mの地点に塀3があり、塀1・4と塀3の間が通路として機能した可能性があります。通路を境に遺構密度が急激に希薄になるため、ここが遺跡東限と推定されます。

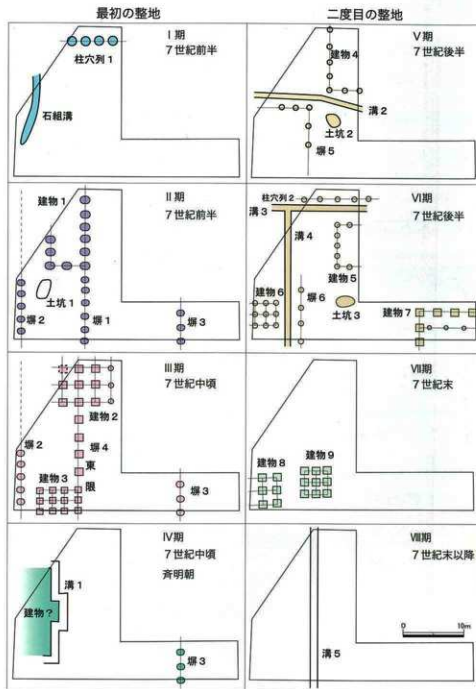
7世紀後半（Ⅴ～Ⅷ期） 調査区一帯は再度整地されて通路的な空間は消え、かわりに溝で区切られた区画内に掘立柱建物が点在するなど、7世紀後半の土地利用は一変します。この時期には、天武朝頃の官衙の存在が推定されていますが、その構造はまだ明らかではありません。

出土遺物

7世紀の土器や瓦が大量に出土しました。上下の整地土から出土した土器は時期が異なるため、整地の年代を考える重要な手がかりとなります。須恵器の甕や新羅産とみられる土器も出土しました。瓦は7世紀前半のもので、その多くが、期の溝1とその周辺で出土し、この付近に瓦を使った建物が存在したようです。

まとめ

今回の調査では、7世紀代の石神遺跡の変遷が明らかとなり、さらに斉明朝における饗宴施設の東限の様子が判明しました。さらに遺跡の規模は、南北約180m、東西約130mと推定され、その全容を把握できるようになりました。



古代の遺構変遷図

石神遺跡の調査（石神遺跡第21次現地説明会資料）

2009.2.14

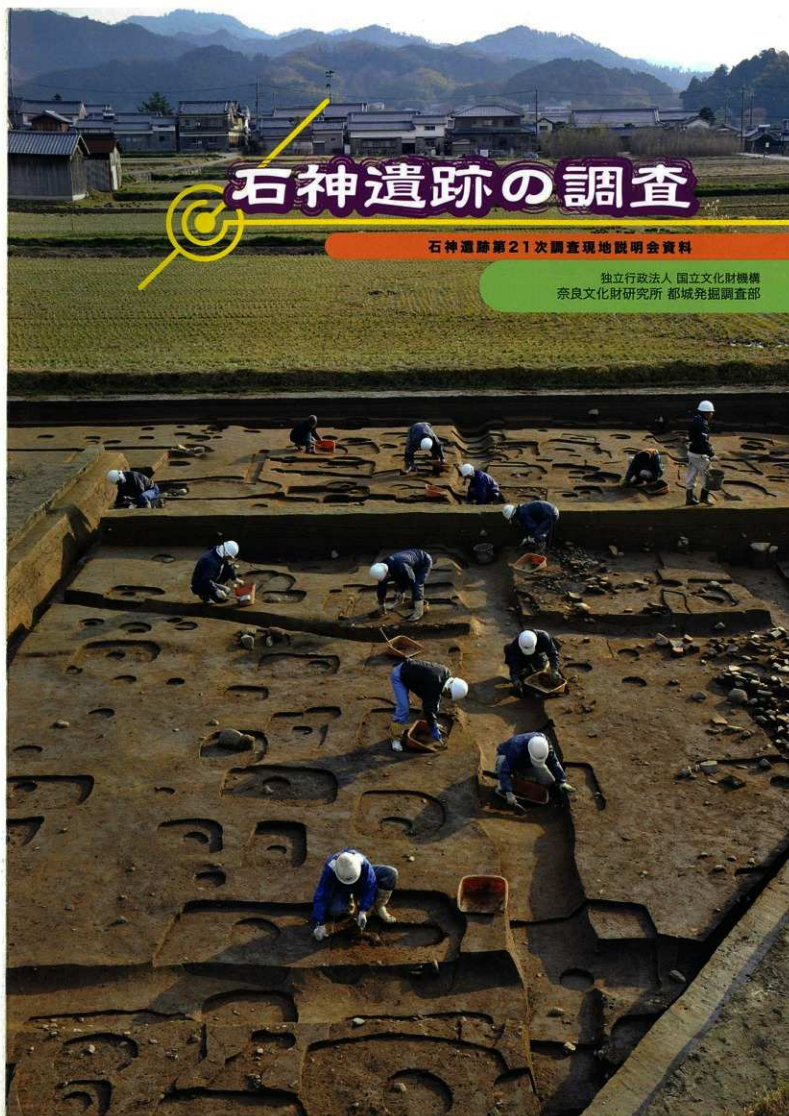
独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部

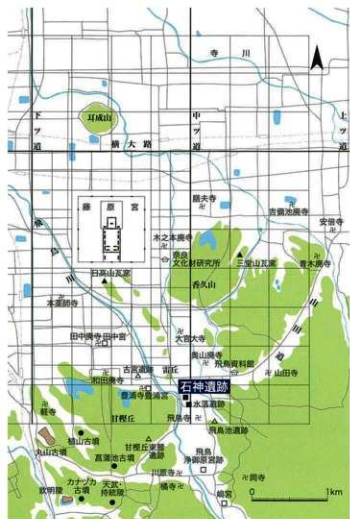
〒634-0025 奈良県橿原市木之本町94-1 <http://www.nabunken.jp/>

石神遺跡の調査

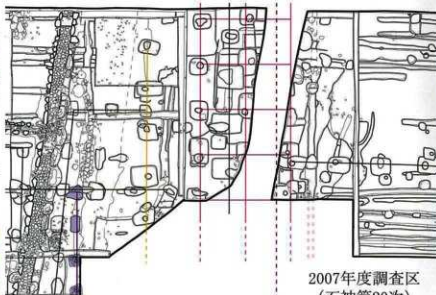
石神遺跡第21次調査現地説明会資料

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部





遺跡位置図



2007年度調査区
(石神第20次)



調査区全景(西から)



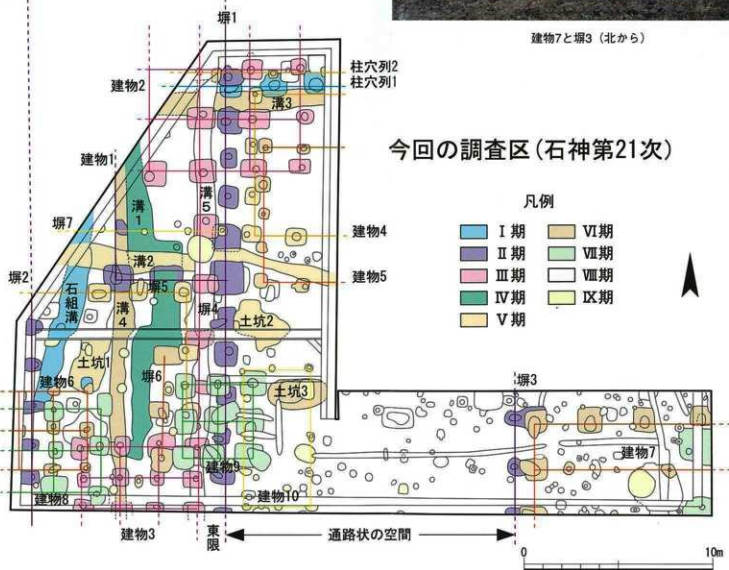
建物7と堀3(北から)



溝1 瓦出土状況(北から)



調査位置図



今回の調査区(石神第21次)

遺構平面図



7世紀前半～中頃の東線施設群(南から)



出土土器